

日記一冊めの表紙の写真

明治四十二年 誕生日(から

明治四十四年 数え年3歳)までの日記の表紙



目次(概要) : : : 頁

・一九〇九年十二月八日

数え年一歳 : : : 10

一九一〇年一月一日

数え年二歳 : : : 26

一九一六年四月一日

満六歳 : : : 31

一九九四年一月一日

満八十四歳 : : : 34

一九九五年二月五日

満八十五歳 : : : 38

【註】

- 一、原文の旧仮名遣いや送りかなは一部、現代仮名遣いに置き換えた。
- 二、判読出来ない字句は、「…」「や」「などで表した。

目次

「俊彦日記」を書き始めに当り記す	7
一九〇九年(明治四十二年)数え年一歳	9
十二月八日(水) 快晴 父(国治)記	10
十二月九日(木) 父(国治)記	12
十二月十日(金) 父(国治)記	13
十二月十一日(土) 母(幽香)記	13
十二月十二日(日) 母(幽香)記	14
十二月十三日(月) 母(幽香)記 雨 夕方から初雪	15
十二月十四日(火) 母(幽香)記	16
十二月十五日(水) 母(幽香)記	17
十二月十六日(木) 母(幽香)記	17

十二月十七日(金)	母(幽香)記	18
十二月十八日(土)	母(幽香)記	19
十二月十九日(日)	母(幽香)記	19
十二月二十日(月)	母(幽香)記	20
十二月二十一日(火)	母(幽香)記	20
十二月二十二日(水)	母(幽香)記	20
十二月二十三日(木)	母(幽香)記	21
十二月二十四日(金)	母(幽香)記	22
十二月二十五日(土)	母(幽香)記	22
十二月二十六日(日)	母(幽香)記	23
十二月三十一日(金)	母(幽香)記	23

一九一〇年(明治四十三年)数え年二歳	
一月一日(土)……………	26
一月二日(日)父(国治)記……………	26
一月三日(月)父(国治)記……………	27
一九一六年(天正五年)数え年八歳 倉吉市盛徳小学校に入学	
一月一日 俊彦本人記……………	29
一月十八日 母(久保幽香)記……………	29
四月一日 俊彦本人記……………	31

晩年の日記

一九九四年(平成六年)	満八十四歳	
一月一日(土)	34
一九九五年(平成七年)	満八十五歳	
一月一日(日)	36
二月一日(水)	36
二月二日(木)	37
二月五日(日)	【最期の日記】.....	38

「俊彦日記」を書き始めに当り記す

一九〇九年（明治四十二年）

十二月八日

父久保国治(記)

日記をしるすことは、一種の意志鍛練法なること、人の既に唱えるところなり。おのれは更に思う、日記の頁を繰り返すことほど人をして清趣を遊ばしむるものはあらじと。実に父は十五歳の時より日記を認めはじめ、今日に至るまで一日も怠りたることなし、今後といえどもまた然るべし。享樂いかりなるを知らざるなり。

およそ追懐には無限の快感をともなう。殊に意識の再生を望み得ざる幼児の状に至つては、人は最大の興味を以つて之を知らんことを求む。然るに不幸なる父は幼児の記録を有せず。遺憾堪ゆべからず。

俊彦のためにこの日記をはじめし所以は、其の生長の後、この記によつて何等かの感興を起さしめんがために外ならず、又、児の發育を樂しまんとするは第一の目的なり。

一九〇九年(明治四十二年)

数え年一歳

父(国治)記

十二月八日(水) 快晴

誕生の日 午前十一時四十五分生まれる、すぐにオギヤオギヤとなく。この声をきいた満〇才おぢいさんと父とは隣の室でホツと胸をなでおろした。

第一に産湯を使って、真白いネルの襦袢の上と裏の白い表は桃色木綿の小さい綿入れを重ねて着る。先ずおぢい様に抱かれる。おぢい様のお髯はなかなか長くて顔にかかる、これは切らねばならぬわいと仰しゃる。鹿野のおほほあ様が見えた。こんどはお曾祖母様に抱いていただく。大きな児だと仰しゃった。お父様にもしばらく抱かれた。からだはごも真赤だ、赤ん坊とはよく言ったものである。

大黄と黄連と甘草(二尾ツツ)とを交ぜて煎じた薬を「ガーゼ」にくませて吸う。布を口元に持って行くとすぐに口をあけてうまそう

に吸う。人は生まれるや否や食物摂取の本能をそなえて居るものだとお父様は感心していらっしやる。小さな盃に二杯ばかり飲んだが間もなく吐いた。腹の中のものも吐いてしまった。

美しい小さな眼をときどき開く。時々泣いた。泣く毎に、それは臍の緒が痛いのだろつと皆んなが仰しやる。

夜はかあ様の傍でねる。乳はまだのまぬ。例の薬をのむ。

坊の生まれた時の家内は、おぢい様、おばあ様、おとう様、おかあ様の四つたり、坊をそえて五人となった。家は、研屋町のなか程、格子付の二階屋、上が二間、下が四畳半二ツ、生まれたのは奥の六畳であった。産屋に入っていた人は、おばあ様と産婆とお医者様だけ。

お父様は一体今日は学校のある日だけれど、かあ様や坊やの為に休みになった。おかあ様は無論学校へ出られないから、今朝、とう様が代って届を書いてお出しになった。宇谷の学校に居らっしやるお

ぢい様は電報でそういってお帰りをねがったのである。

父(国治)記

十二月九日(木)

《瀧の才》昨日は天気が好いし家内は皆な揃うし、実にいい日に
生まれたものだ。

長かった頭がだんだん円くなった。からだはやっぱり真っ赤だ。

今日もまだ乳をのまぬ。例の薬だけのませてもらう。

今日名がきまった。＝俊彦。おぢい様と考えて下さった。此以外に、
一郎、精一、鉄一、守一、晴彦、一彦、など沢山あった。このつちで俊
彦が一番いいと、とう様とかあ様が仰しゃって、おぢい様が賛成して
下さってとうとうこれにきまったのである。

早く笑うようになればいいなあとおとう様は仰しゃる。

お祝いが諸方からくる。

十二月十日(金) 父(国治)記

今日から乳を飲む。かあ様の乳房は今日から乳がいっぱい出来だしたのだ。何より嬉しい事だと皆が仰しゃる。

晩方おとう様のお帰りを待たないで命名式をすましていただいた。産婆の婆さんに抱かれてお膳の前にすわる。皆様からいただいたお盃に婆やの手で受け取ってくれた。

夜お祝いの方々が四五人いらっしやる。皆いじ子だとほめていった。ほめられるのはお世辞でもかまわない。

母(幽香)記 十二月十一日(土)

今日はお薬を飲まないで乳ばかりであったから、お腹も痛まず、すかなかつたから余り泣かなかつた。

お湯をつかうことを一日やめにした。昨日は産婆をつかはして貰っ

た時あまりくさめがついたので風邪を引いてしまつから今日一日休
もつと、かあ様の発議が有つたからである。

お父様今日は宿直でお帰りがなかった。

母(幽香)記

十二月十二日(日)

朝方から臍の緒がちぎれて居るのを皆が知らずにいたから痛くて
泣いたが、八時には取っていただく事が出来た。

今日は大いに機嫌がいと皆に褒めていただいた。

臍の緒が切れたので湯をやめとした。

お父様が坊の顔が見たくてしょうがないだらうと母様が仰しゃった。
お父様は今日も宿直でお帰りなさらなかったからである。

お乳のおかげで少し肥ってきたし眠っている時は笑うことが出来た
した。お祖父様も今日は坊の顔を見て、坊とお話をなさった。朝から

晩まで二三度、目を覚ましたがあとは心地よく寝通した。

母(幽香)記

十二月十三日(月)

雨夕方から初雪

今日はお父様が久しぶりにお帰りになる日だ。身体を清潔にしておかねばならぬ。お湯をつかわして戴いたが其の為か夜は鼻がつまって呼吸が苦しかった。十二時頃までお祖母様に抱いて戴く。夜は二度、目をさまして母様の乳をいただいた。

一昨日から左の睾丸が赤く腫れて痛かった。皆が安まして下さったが、今日は全快したようだ。お乳が沢山なので坊一人ではとても飲み尽くせない。母様は始終はって痛いといってひねったり搾ったりしていらつした。しかし久しくかかってしぼったより坊が一度飲んだ方が余つ程すくそうだ。坊はそれ程一度でも沢山飲んだのだ。だから昨日よ

りもまた肥って可愛らしくなった。

母(幽香)記

十二月十四日(火)

今日は七夜だからお祝いを下すた家に赤飯を持って行く日だ。昨日からお米をかつたり小豆を洗ったりして有ったが今朝お祖母様の頭がひどく痛み出したので一日延ばす事に決めた。

午前中土師の小母様が見えた。上がらぬと仰しやるのを祖母様が坊の顔を見てやって下さいといつて無理に奥まで上がっていただいた。坊が大きいと褒めて下さった。

風邪もよくなつたし昼の内は殆ど寝通した。

午後、母様はお乳がはつたまらぬといつて三軒東隣の坊より一ヶ月兄さんを頼んでお貰いなすつた。

夜はお父様に久しく抱いていただいた。

母(幽香)記

十二月十五日(水)

昨日の代わりに今日赤飯を蒸して貰った。祖母様一人忙しい事であった。坊も気の毒と思ったか一日大人しく眠った。そのせいか夜は目がさめて母様一人こまっというらしゃった。

今日赤飯を持って行った家が二十軒有った。お祖父様がお留守であったから・で送る都合で有ったが・が寄って呉れなんだので遂々送らずにしまった。

母(幽香)記

十二月十六日(木)

今日も寒いので湯をつかわずに腰湯でしまった。

三軒隣の兄さんが昨日も今日も午前と午後と夜と三度来て沢山飲んで帰った。兄さんは・トシヒコ坊より四十日程早く生まれたのだ。そつな、然し重さが坊と同じ位しかない。と母様が仰しゃった。母乳の

少ないせいなのだろう。

坊は母様の抱き方を記憶してしまった。人が(坊を)母様から受け取って抱くと泣いて見せた。又(坊を)人から母様が取って抱いて下さると泣くのを止めた。坊も追々賢くなつて来た。

夜になると坊を見に来た人が沢山有つた。坊の睦着(ムツキ)の香いでも嗅ぎたいとお話しなすつた。森田先生も見えた。それから中島森藤の小母さんもいらつしやつた。

今夜、寝られなくてむずかつたから母様と曾祖母様がかわるがわる守りをして下さつた。父様は今夜も宿りでお帰りなさらなかつた。

母(幽香)記

十二月十七日(金)

今日、坊が背伸びをしたとき尺でさして、鯨の一尺三寸有つたと母様が仰つた。坊は今日はお行儀がよかつた。

母(幽香)記

十二月十八日(土)

午後には祖父様もお帰りなすつた。
今夜は賑やかであつた。

母(幽香)記

十二月十九日(日)

今日、母様に抱かれて初めて二階に上がつて見た。二階には父様一人床をとつて寝ていらつしやつた。お風邪だそつな。
父様は坊の顔を見て下さらなかつた。
お祖父様に暫く抱かれてお守りをして戴いた。
今夜から母様の床の中に抱かれて寝る事にした。

母(幽香)記

十二月二十日(月)

昨日からお風邪が悪いので父様に抱っこをされる事が出来なかった。今日もお宿りだからお顔も見なんだ。お祖父様にお守りをして戴いた。今夜お祖父様が茶色のピロイドの帽子を買って下さった。

母(幽香)記

十二月二十一日(火)

お風邪が悪るかったそうので父様は午前中に帰って二階でやすんでいらしたが余り淋しいといつので夜は下に床をのべておやすみなすった。奥には父様と母様と曾祖母様と坊と四人である。

母(幽香)記

十二月二十二日(水)

今日はお父様はお風邪が大そう悪かったので、学校をお休みなさっ

た。今夜初めて銭湯へ行った。曾祖母様と祖母様とがお入りなさって後から母様と坊とが入った。初めは少し泣いたが、すぐ様子が分かったから止めた。母様もお湯は坊が生まれてから初めてであった。夜はよく寝た。

母(幽香)記

十二月二十三日(木)

坊がお宮参りに着る紋付きの上着をわざわざお祖父様が往岡まで行って買って来て下さった。お父様は少しよかったです。学校へ出てお帰りになったが、夜は床の中で大そうお苦しそうであった。

夜中に坊は一度起きたが、今夜はお父様も起きて下さって母様も坊も嬉しかった。

母(幽香)記

十二月二十四日(金)

今夜九時前に母様と祖母様と一緒に銭湯へ行った。坊は随分熱かったが泣かなかつた。入り合わせた人達は皆寝ていた。お湯から着物を脱ぐ時、昨日お祖父様が進藤から買ってきて下さった玩具の乳が背から出てきて、お祖母様と母様は大層驚きなすって、さぞ痛かつた事だろうと坊をなでてくださった。夜は気分が悪くて一時過ぎまでむづかつて母様と祖母様とを起こしてしまった。

母(幽香)記

十二月二十五日(土)

お父様は昨日の宿直では無理をなさったので今日は大分お悪そうであった。夕方からお床にお就きなされた。

坊は白ネルの切れで頭巾を縫っていた。いつぞや買っていたいたのは余り大き過ぎたからである。

今夜は大そう大人しく寝た。

母(幽香)記

十二月二十六日(日)

今日から暫く冬季休業であるからお祖父様も父様も家においでだから賑やかで嬉しい。

お父様はお風邪なので坊と同じ炬燵にいらつしゃったから度々抱いていただく事が出来た。

母(幽香)記

十二月三十一日(金)

まだ、ただ泣いて寝てくらししてきただけで、格別の変化はない。強いて記してみれば次の如くである。

体重はだんだん増えてきた。銭湯(金)連れて行ってもらう度毎々かあ様は手ごたえが違つと仰る。

隣の人に乳を上げる事を断つた。

皮膚の代謝が頻繁だ。顔の皮などくるくるむける。

がよく動き出した。

手首(腕関節)にくくりがついてきた。

今日の晩(三十一日)お父様とお母様と三人で二階で寝た。

一九一〇年(明治四十三年)

数え年二歳

父(国治)記

一月一日(土)

お父様とお母様は学校拜賀にいらつしゃった。坊は泣かないでおとなしくしていた。

今夜も二階で寝た。二度まで泣いてお母様を困らせた。

坊が生まれてから今日までいろいろお世話していただいた鹿野のおぼはあ様が午後の四番汽車でお帰りになった。おぼはあ様は七十六才である。

坊は二つとなった。おぢい様は五十九(満)、おばあ様は五十四、お父様は二十八、お母様は二十三。

父(国治)記

一月二日(日)

前日の第二項(おぼはあ様のお帰りの条)は今日のあやまり。

今日からまた階下に下りてかあ様だけといっしょにやすむことになった。二階が寒いからといつのである。

父(国治)記

一月三日(月)

お父様のお召物に、しいをした。抱きさえすれば、こんな事はあたりまえだと仰しかった。

一九一六年(大正五年)

数え年八歳

俊彦本人記

一月一日

《瀧六才》

祖母 紫霞

オバアサン八六十一

父 国治

オトウサン八三十四

母 幽香

オカアサン八二十九

妹 菊枝

キクチャン八三ツ

本人 俊彦

ボク八八ツ

母(久保幽香)記

一月十八日

《瀧六才》

お父さんは用事があつてお留守、母ちゃんは菊ちゃんを寝かせる為に二階、俊はお祖母様とお炬燵から、次のお話をした。

俊彦 「菊ちゃんが高等になる頃には、僕はもう大学校に出る様になる、そつすると菊ちゃんにはよめさんを取つてやるだわい、俊はむこさんを取るだし。おばあさんは、よめさんを取んちゃつた事があるか」

祖母 「さあどつであつたかな」

俊彦 「十五位の時の事だけい、忘れんちゃつたるうなあ。

おじいちゃんは、むこさんを取んちゃつたことがあるか」

祖母 「さあ」

俊彦 「どつたんは」

祖母 「どつただか」

俊彦 「があかんは、よめさんを取んちゃつた事があるか」

祖母 「があかんは、むこさんを取んちゃつたがなあ」

俊彦 「たれをいな」

祖母「とうたん」

俊彦「アハ、可笑しいなあ、あ、おかし。女が男を取るちゅうよ
な。俊等は男だけい、むこさんを取るだ。そうして画報が沢山あ
るけい、あれを分けてあげて一緒に遊ぶだ。それから菊ちゃんに
は、よめさんを取るだ」

中々理屈が上手になった。今夜は、又、こんな話もした。

(以下省略)

俊彦本人記

四月 一日

倉吉市盛徳小学校に入学

《瀧六才》

キョウムセイトク

シヨウガツカウエ

ハイタ。

オバアチャンニツレフレデ。

一ウガクシキガアツタ。

《父(国治)注記》

今日は、はじめての入門故、朝、餅をついて一同祝賀。

羽織袴の壮健な愛らしい姿を見ては実に彼の前途に幸多かれと祈らざるを得ぬ。

父は、今、無職閑居中、胸中種々計画を抱きつつ彼の将来にも多くの希望を囑するものである。向上、努力、これ人生の一切。努力し尽くして宇宙一体の向上の犠牲となるのである。人生は進化するのが天の命である、私の進化しつくした後は、彼がこれを継承して更に一層大なる仕事を成し遂げるのである。

一九九四年（平成六年）

満八十四歳

一月一日(土)

満八十四才 新年の朝八時に唐紙の外から静かに起された。昨夜除夜の鐘からまた一杯のんでおそくなつた。漉瓶(しびん)を二度使つて快く寝過ぎたらしい。和子がおせち料理と餅雑煮を出してくれた。よね子がトソ代りに徳利の燗酒)をつぐ。年々元旦がさっぱりとしてくる。

ひる前に年賀状の束が配達された。約320通か、仕分けして出状との照合をすませる。Bath(浴場)のComputer Controlが調子わるく、ぬるい湯に入る。よね子はshower。

来客は一切なし、こちらも出ない。夕食はおせちと魚。

一
九
九
五
年
(平
成
七
年
)

満
八
十
五
歳

満八十五才

一月一日(日)

病院の一室でひとり新年を迎える。

心安らかに、家の中、周囲の多くの人々に感謝している。形の上では不自由で、何もできない生活だが、それでも気楽に受け入れて過ごして行くように勤めている。

しかし字が下手になり、書くのも遅くなった。それでも新年を迎えるとは思っていなかった。

夕方、陽一の一家、裕一家、八尾二人が病室に来てくれた。

二月一日(水)

日記帳をさぼり始めてから三日たった。几帳面に考えることやめたのだから何日たってもよいのだが、何か理由か原因があるだろう。先ず体

調がよくない、記憶が危ない、からだの痛みも増した、病気も進行している。何か天命のよつなものも感ずる。

二月二日(木)

今日から病院で座椅子使う。背中の壁が90度近くの垂直に近く立てば、そこには重力が大きくかからないから楽に座ることが出来る。座椅子はそれを実際に見せるのが目的で作られたものである。正しい姿勢で座ることはいいことだから皆さんに薦めて座敷の中が起居整然となるのは結構なことだ。

交通事業の整然として、スポーツの振舞いが多いの人に美の行動を見せてくれるなどを含めてよいことだと思つ。

【最期の日記】

二月五日(日)

満八十五才

日によって重要な出来事をむかえ、また必ず記録に残る事柄も連日のように起こっている。毎日起こっている事柄は極めて限られたことである。頭の中で考えているのは何事も勝手であるが、実際の私の病室の中の生活ほど少ししかできないのは外に類例はないといってよからう。思ってみるごとく、実際に行っていることにこれだけ大きな違いある人はまずほかにないといってよろしいだろう。

平成六年二月二十日 入滅(日立戸塚病院にて)